



Title	疑惑
Author(s)	芒亭
Citation	各務時報, 56
Issue Date	1931-10-30
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/77689
Type	column
File Information	A010_0756P9-11S61030.pdf



[Instructions for use](#)

幼植物の生理作用を完小する
 其後の組織生成上必要なる満
 之を外部に求めざるべからず
 植物は葉緑の生成十分なら
 黄病の徴候を呈し終には枝の
 植物は其生長を停止す、莖
 殊に其害を被り易きを見れば
 「」は窒素の同化及蛋白質の合
 共に重要なる或作用を掌る事
 りと發表してゐる。それが爲
 各區に於ける蕃茄實を灰化し
 「マンガン」を松野教授譯述
 浸出法中にある方法で定量し
 を得た。

硫酸銅 無トキ
 滿俺 銅石灰 シン

0.01% 0.02% 0.03% 0.04% 0.05%

如く硫酸滿俺添加區にありて
 シン區の約5倍の「マンガン」
 ることは面白い事と云はねば
 之等の問題は土壤肥料學上、
 學及生理化學上大いに研究す
 なり。
 望み本研究中御指導を賜はり
 授に謹謝し、土壤の提供を受
 華市川清氏に厚く感謝の意を
 土壤肥料研究室)

文苑

疑 惑

芒 亭

いつもの様に私は岐阜から笠松に行
 く電車に加納と云ふ驛から乗つて境川
 と云ふ驛で降りた。釣場に定めて居る
 境川の少しトロロになつて居る處はそこ
 から約四丁位である。三丁ばかり電車
 の線路を歩いてから右に一寸折れると
 境川の岸に出る。此岸を一丁ばかり下
 ると川が急に折れて居る、その折れ目
 の處である。この折れ目の處に小さな
 溝の様な小川が流れ込んで居る。然し
 この小川は餘程水が増した時でない
 魚は少しも昇らない極く浅い川である
 電車から降りて私は一人線路を歩い
 て居た。すると向ふから恐らく面白く
 行かなかつたので歸つてくるらしい鈴
 四十五六の男が釣竿一本とピクを持つ
 てやつて來た。何でも道樂と名のつく
 様なものはその道樂に入りびたつて居
 る人々を皆コスモポリタンにするもの
 である。餘り他人に口をきかぬたちの
 男でも同じ道樂の人には氣輕るに言葉
 をかける。
 「どうでした今日は、駄目ですかね」
 私はさう云ひながら線路の横の小さ
 い道に彼の爲に道をよけてやらうとも
 しないで彼の前をさえぎる様に立ち止
 つて云つた。相手が少しもぢ／＼して
 ゐるので更に語をついで云つた。

「田に水をとる爲に川をせいで居るから駄目でせう。流れて居ないでせう。」

彼は漸く口をきいて

「流れて居ります。よくひく事もひくんですが」

さう云つて彼が再びだまり込んだので

「引きますか、それぢやまだ早いぢやありませんか」

さう云ひながら私は彼の顔を見た時そこにならぬ色を見た。彼は何者にか追つかけられてでも居るかの様に不安さうに後をふり顧り見ながら云つた。

「少々氣味の悪い事がありました……別にどうと云ふ譯ではないんですが、何も悪い事する人ではないんでせうか」

「それ丈云つて又だまり込んだ誰か釣つてはいけないとでも云ふのですか」

「いゝえ魚釣る人ではないのです。いや何でもないんでせうが、どうも氣味が悪くて、私は今よく引いて居たのに四本竿を入れたなりに逃げて来たんです。その向ふの茶所に親類のものがあ

るから誰かに一緒に来てもらつて道具をとつて来ようと思つて居る處です」

「男ですか」「さうです」「いくつ位です」「二十四五です」

「そしてどうして氣味が悪いんです」「別にどうと云ふ譯ではないんですが、

上手の上に居たんですがやつて来たんです。あなたがお出になるなら一緒に行きませう」

二人は一緒に歩き出した、そしていつのまにか彼は私の後になつて居た。

私は何度も此男が少し變なのではないかと思つて何度も振返つて顔を見た。背後にくつついてくるので少々氣味も悪かつたからである。彼の顔には恐ろしい恐怖のあとの神經の痲痺とも云ふ可き何となくぼんやりした處と逃げて行く者のいつも持つ異常な眼光とを持つて居た。私も少々氣味悪くなつた。

彼の言葉は極めて不明瞭で而かも云つて居る事も何を云つて居るかよく分らなかつた。私は歩きながら靜かに聞いてやらうとおちついて語り出した。

「その男がどうしたと云ふんです」「別にどうしたと云ふ譯ではないんですが、

上手の上から足音をしのげる様にしてやつて来はじめたのです。氣味が悪くて、然しよく引いて居ました。

「どこんとこです、曲りかどの所ですか」

「曲りかどは今日はあきません、あの上流の小川の處です」

彼はしきりに私をそこに誘ふような事ばかり云つた。少くとも道具をしまつする間居てくれと云ふやうな風であつた。それでしきりにそこで一緒に釣れと云つた。そして恐ろしかつた話しはわざとさけて居る様であつた。然し

私としても少し聞いて置きたかつたので色々聞いて見るが矢張り前と同じ様に「別に悪い人ではないのでせうか」とばかり云つた。そしてその小川の處から人家までには少くとも五六丁はあ

るので近處に人が居ないから氣味がわるかつたので釣には一人で来るものではないとか人や家のない様な處に来るものでないとかしきりに云つて居た。

漸く小川の岸に出た、彼が云つた處に四本の竿が入れてあるのがすぐ目に入つた。私は小川にかゝつて居る鐵橋の上

に立つて形勢を見て居ると彼は私が逃げでもするのを恐れる様に「いらつしやい、いらつしやい」と何度も云つた。彼の竿のある處は鐵橋を渡らな

いで右に降りた桑園の縁である。彼は道具をいそいで整理し始めた。私はそこは日向がよくないと思つたから釣る

から對岸から釣らうと思つたのである。私はさう云ひながら鐵橋に立つて彼の方を一寸見ると一町ばかりへだたつた

小川の上流の堰の所に誰かかゝんで居るのを見た。見て居るとその男が此方

を向いた。私はその瞬間「此男だな」と思つた。目が少し鋭い男であつた丈だ

が二三度此方に向いた時、既に話を聞いて居た爲か一寸氣味悪いと思つた。

私は知らぬ振りして對岸に行つた。「池に行きませんか、八劍の」例の釣友

が云つた。早速用意しながら二人話して居ると例のきみ悪い男が立ち上つて

私等と反對の方に歩き出した。私はおそる／＼それをだまつて見送つた。その時始めて私は靜かに彼を観察した。彼の髪は丸刈にしたのが少しも手入れ

しないで一面に五寸位のびて居るらしかつた。それから彼は膝の上までの短かい着物をきてその上にかたく帯をしめて居た。肉は太つて皮膚は健康さう

な色をして居た。小柄の男ではないが遠くから見ると大菩薩峠の米友よろしくの風彩であつた。然し恐らく何の先

入主もなければ逃げ出す程ではないと思つた。

例の釣友は鐵橋を渡つて来た、池の方に

行く爲である。私が小さい聲で「あの男でせう」と例

の男の方を指すと彼は愕然として「居ましたか、どこに居ました」と云つた

彼は目が悪いのでよく見えなると云ふので彼の風彩を私が説明すると「それだ／＼」と云つた。

いよ／＼もう危険より遠ざかつた私は傍の男が恐ろしがつて居るのが少し滑稽に見えはじめた。

「一たいあの男がどうしたんです」と私は改めて又聞いた。

「上手の上からしのび足で私の方に近づいて来はじめたのです」「それ丈ですか」「さうです、あたりに家がないもんですから」

彼は今更少々自分があんまり大げさ

だつた事をはづる様な風であつた。そ

そこに文化建設の絶え間なき努力が

秋片々

秋片々

秋片々

してしきりに野外に一人出る事のさびしい事などを話した。先程私が彼の恐怖を同情する様に夕方暗くなるとさびしいと云つた言葉を彼は思ひ出してつとめてその私の考へに賛成して「夕方おそくなると氣味が悪いですね」と云つた。

私等は八剣と云ふ驛のそばの池に行く爲に又鐵道線路をあるいてゐた。八劍驛は境川驛の次である。私はその池の話はよく聞いて居たがまだ行つた事がなかつたので楽しみにして歩いた例の釣友は釣の方には可成り明るいらしく、いかにも経験家らしい話しをした。

池に行つたが池はあまりよくなささうなので八劍驛のすぐそばの境川の岸で二人糸を垂れた。そこは可成り有望の様に見えた。彼は五本の竿を全部水に入れて五つのうきが静かに水面に浮んで居るのを見て、やつと落ちついたらしく煙草に火をつけた。その時始めて彼は平靜に歸つたらしかつた。私は彼の恐怖の大げさだつた事いや無意味だつた事を考へ今やつと落ちついて思ひ切り煙草の煙を心地よげにすい込んで居る様子を見て一寸笑ひたくなつた。恐らく彼自身にも自己觀察の餘餘が出来て心の内で笑つて居るだらうと思つた。

の晩歸つて私は釣つて來た魚を料がら妻にこの話をして聞かした。

妻はたゞだまつて聞いて居た。

手足を洗つた後で私は食膳について「カナンクツ」の鹽燒の焼けあがるのを待つて居た。鐵器の上で魚を裏がへししながら妻が思ひ出した様に云つた。「その人は魚が逃げるといけないと思つてさうつとしのび足で近寄つて來たんぢやないでせうか」
「俺もさうだと思ふんだ」
二人は思はずふき出した。

田園生活

市川生

土は寶洪空の如き、偉大な愛の持主である。人生にあらゆるものを與へていさゝかも報酬をまちもうけてゐない人が求めるものは一切無條件で與へてくれる。都會人は土の所有に夢中だが土を愛することをしない、却つて泥にまみれる事を嫌悪する、田園人は土を讚美しなければならぬ立場にありながら、却つて土に飽き、之にそむいて都會に集つて來る、妙な状態である。何故であらうか？

自然生活に恵まれない都會と物質文明に恵まれない田園は、ともに吾々希望するところの理想郷ではない、田園の自然美をとり入れた都會と便利な物質にも恵まれた田園生活を、吾々は理想として、之が建設につとめつゝあるのである。

そこに文化建設の絶え間なき努力がある、向上がある。

吾々は心を新にして土に立たなければならぬ、もつと深く土の愛や田園生活を理解して、快よく信仰に生きねばならぬ。

現代の田園生活は餘り不便であり、娛樂の種類にも乏しい、吾々は良く聞くとデンマークの田園生活に學ばねばならぬ點が多い。日常生活に於て改めねばならぬ點が甚だ多い、これが實現は諸君の異常な努力にまたねばならぬ。香はしき土と緑の群團と、のびやかな蒼空とは田園を美化してゐる、山川草木禽獸の有様などなつかしいものひとつだ、吾々は自然に恵まれた生活、力づよい純真な生活をして、更に光と愛と力との所有者にしたい。ほんとうにほんとうに覺めて田園生活を田園生活を讚美しつゝ、眞面目な人間味にあふれた生活につき進まなければならぬ。

快よく土を耕せさうではないか、もつと眞面目に深刻に深刻に田園そのものを考へやうではないか、そこに田園生活者の生存の意義が生じ、この種の學校に學ぶ者の大使命が生れて來る。遙に諸兄等の健康を祝しつ。

(十月九日夜)

秋片々

A 3 野 口

蜻蛉

秋を表すものは數多くあるだらうが赤蜻蛉は最もその感を深くする一つだ。菊の支柱から支柱へ、そして今度は枯れた蘆の先へと飛廻つて又元の菊の支柱へ返つて來る。丁度秋の景色を眺めて來ては菊にそれを囁くやうだ。

どこから出て來たのか捕蟲網を持つた少年(未來の昆蟲學者?)手が次第に赤蜻蛉の體に近づいて行く、と思ふと急に網が左右にゆれて蜻蛉の體を包んだ。はつと思つた瞬間スーッと身も軽く飛んで行く蜻蛉、人が去つたら又元の所へ來たさうに遠くへも行かず輪を描いて飛んで居る。

秋の山

天高く何とかと云ふ秋の空にくつきりとその姿を表してゐるのは鈴鹿山脈だ。

朝日をうけては青緑に輝き、夕日に照らされては紫緑に映えて、何とも云はれぬ爽快味を覺える。

秋の山を踏み分けて種々の探索をするのも一入興の深いものがあらう。だが眺めたる秋の山もその崇巖さに於て決して劣るものではなからう。